

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】曹有敬

【所属】(助成決定時) 東京大学人文社会系研究科

【研究題目】戦後西ドイツの作曲家におけるコラージュ技法のポエティクスとポリティクス

【研究の目的】(400字程度)

本研究は戦後ドイツ音楽の前衛運動とモダニズムの中心であったダルムシュタット楽派を強く批判していた、戦後第一世代の作曲家達の実践活動や言説を通して、彼らが行った「音楽のコラージュ」が当時の社会及び文化をどのように表象するのかを明らかにすることを目的とする。1960年代半ばに音楽実践領域に現れたコラージュは、1980年代以降ポスト構造主義の展開の中でアカデミズムの研究対象となり、間テクスト性の方法論と結び付けられ、その技法的側面のみが取り上げられてきた。しかし、1960年代、70年代の「音楽のコラージュ」を巡る理論と実践では技法上の問題を超越し、多層的な社会・文化的諸相が示されている。本研究はこの時期に描き出されている「音楽のコラージュ」の諸相に着目し、それがどのような文脈において台頭し、形成されたのかを考察する。この検討を通して、この時代の「音楽のコラージュ」が内包する様々な批判的性格の実態が浮かび上がり、従来の研究に欠如していたその歴史性が検証される。

【研究の内容・方法】(800字程度)

上記の研究目的の達成に当たって、本研究では「音楽のコラージュ」を巡る1960年代、70年代の理論を再考察した上で、事例研究を加え「音楽のコラージュ」が本来孕んでいる政治性(詩学の裏に隠れている政治的暗示)のあり方を明らかにしていく。この作業は、最初期の「音楽のコラージュ」における社会批判性を十全に説明する理論を再構築することを可能にする。

助成期間中には、これまで取り組んできた理論的考察に実証的研究を加え、次の研究を行なった。まず戦後ダルムシュタットに積極的に関わっていた音楽美学者 T.W. アドルノと C. ダールハウスの「参加芸術論」を手がかりに、当時の「音楽と政治」論争の中で「音楽のコラージュ」を位置付ける試みをした。この考察を通して、理論の領域ではナチス時代から得た教訓から政治的音楽ないし音楽の政治化に対する厳しい評価が下され、「音楽」と「政治」は二項対立的に捉えられていたことを明らかにした。それは同時代の作曲家達の社会的、政治的活動を制限する結果をもたらすと同時に、唯美主義傾向の硬直化を促したのである。

それに対して、同時代の作曲家達は上記の思想家達の形式主義の立場を批判的に受け入れながらも、創作活動を通じて社会的責任を果たす方法を常に模索していた。その実態を明らかにするために、戦後第一世代の作曲家の実践活動、音楽理念、政治的理念を交差する結節点に焦点を合わせ、主に「音楽のコラージュ」を成り立たせた思想的・歴史的基盤を考察した上で、社会参加に対する彼らの思考の実態を探った。2023年6月にベルリンの Akademie der Künste アーカイブで1次史料調査(手紙や論考など)を行い、収集したテキストの分析から作曲家の実践においては1960年代、70年代の「音楽のコラージュ」は戦前のナチスから戦後の68年運動まで発展してきた反ファシズムやコスモポリタニズムといった思想を土台に形成してきたことを検証した。その成果の一部を、2023年8月韓国で開催された「2023 オペラセミナー」で講演し、今後は「時間の移動、空間の経過——ツィンマーマンの《兵士たち》」(仮)、『オペラの中の美学 IV』(韓国語、2025年3月出版予定)として公表することを予定している。

そして、上記の「音楽のコラージュ」を巡る理論と実践を総合的に捉え直し、理論と実践の間には社会参加に対する態度の乖離があったことを新たに指摘した。すなわち、理論では「音楽」と「政治」は二項対立的に捉えられたのに対し、実践では「音楽のコラージュ」を通して「音楽」と「政治」は芸術と生の統合という理

念のもとで発展していたことを明らかにした。こちらの成果は、博士論文の当該章に取り込み発展させる予定である。

【結論・考察】（４００字程度）

本研究は、従来技法的側面のみにおいて理解されてきた「音楽のコラージュ」が、1960年代、70年代の初期の受容の時からすでに歴史的・社会文化的事象との関わりの中で成立していたことを明らかにした。とりわけ、理論と実践の間の「音楽」と「政治」の関係に対する認識の相違を浮かび上がらせ、その中心にあった「音楽のコラージュ」の政治性を立体的に捉えることができた。1960年代、70年代という時代文脈からみた「音楽のコラージュ」は、ナチズムの過去、反ファシズムの現在、そしてユートピアの未来という問題が重層的に絡んでいたことが判明した。

本研究は作曲技法研究におけるコンテキスト研究になるため、個別の作曲家の技法や様式を単に時系列に記述してきた音楽史を書き換える端緒を提供するだけでなく、当時の社会問題に積極的に介入していた作曲家達がドイツ戦後思想に関わっていたことを彼らの言説を通して示す点において、ドイツ戦後思想の流れの解明に寄与することができる。